

百年先を見通した政治家・後藤新平

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)



生誕150年を迎えて後藤新平への再評価が高まっている。

『大風呂敷』『総理大臣なれなかった二流の政治家』から『桁外れの時代を超えた政治家』と、生前の評価は真っ二つだったが、今や、明治以降の政治家の中では、百年先を見通し、世界的なスケールを持って実行した唯一の国際的な政治家ではなかったか、と評価はうなぎのぼりだ。

安政4年(1857)生まれの後藤の名を一躍天下に高らしめたのは板垣退助の遭難事件である。

「板垣死すとも自由は死せず」の名セリフの遭難に際して、愛知病院長時代に、上司の命もまたずにかかけ、非難が起ったが、「医者としてのつとめでござる」と大見栄を切った。

次は相馬旧藩主家の有名なお家騒動「相馬事件」に連座した。持ち前の侠気を出して病主の診断に当たったのが、共謀罪として逮捕され、内務省衛生局長の要職を棒に振った。

しかし、後藤はビクともせず、裁判所へ引かれて行く際、編笠姿でうなだれて歩く被告の中で、唯一、昂然と編笠もはずして、周囲の見物人をハイゲイしつつ入廷。法廷では裁判長を圧倒する大弁舌を振って冤罪を主張、最後までその豪気を貫き通した。

事件は後藤の無罪で終わったが、あとは、さっさと田舎に引っ込んで読書と昼寝三昧しているとその辣腕を期待して、再びお呼びがかかった。

日清戦争での兵士帰還に、検疫部創設の相談を持ちかけられ150万円の予算をふっかけ陸軍は腰を抜かさんばかりに驚いた。陸軍きっての大物・児玉源太郎が肝胆会い照らして承諾し、広島県似島に検疫所をつくって成功し、衛生局長に復帰した。

1898年(明治31年)に第4代台湾総督となった児玉源太郎に乞われて民政長官で赴任した。台湾の経営は軍人の強圧的な統治で失敗していた。後藤は「台湾は植民地でな

く、新領土である」と主張し、武断政治を抑え「生物学的、科学的統治法」を実践した。

「ヒラメの目が一方に二つあるのは、生物学上の必要があるから。無理やり変えると、目玉を正してヒラメを殺してしまう。政治も同じ。台湾に昔からある慣習、制度は十分尊重して、日本の文化的な制度と施設を押しつけてはいかん」と着任早々、台湾政策20年計画で6500万円の公債発行の大プランをぶち上げ、『大風呂敷』と評された。

これは約半分に削られたが、搾取による植民地政策ではなく、民生重視の産業振興、道路(幅40^尺)、鉄道、港などの交通インフラ整備を推進した。新渡戸稲造を殖産局長に迎えて、台湾の土地にあったサトウキビ、砂糖、米などを栽培、生産を大きく伸ばした。約17万人のアヘン中毒患者を抑え込んだアヘン政策は国際的に高く評価された。

後藤はプロジェクト男であった。国際的な構想力を持ち、相手の文化を尊重し、科学的に統治、マネジメントする能力は日本の政治家では例がないほど傑出していた。その手法はまず、シンクタンクを設置して専門家による科学的な調査を行い、百年先を見越した国際的に通用する計画作り、若手の仕事人を集めてやり遂げる。

台湾に次いで明治39年に初代満州鉄道総裁になったが、ここでもヨーロッパの近代都市を上回るスケールの都市計画プランを作って、成功する。その後、後藤は外務大臣にもなって、日ソ関係に尽力する。

大正9年12月、東京市長に就任して12年4月まで務め、関東大震災(大正12年9月1日)直後、震災復興のため内務大臣、帝都復興院総裁に帰り咲いた。

この東京大改造の絶好のチャンスでは30億円の帝都復興計画(当時・東京市予算は1億3千万円)を作成、都心から8本の環状道路を作る壮大なプランを出したが、『また大風呂敷か!』と大幅に縮小されてしまった。

今、環七1本のみで、完全な交通のネックになっているのを見ると、80年前の後藤の先見の明には驚くが、現在の東京の都市骨格はこの時できたのである。昭和4年(1929)4月に73歳でなくなった。

「人は日本の歴史に五十頁書いてもらうより、世界の歴史に一頁書いてもらうことを心掛けねばならぬ」との言葉を残しているが、後藤の目は日本をはみ出していたのである。

<禁転載>

